

あとがき

本年九月五日は、有坂秀世博士の生誕一百一年の日に当る。「その学説の理解に関しては、周辺部をとりまくその他大勢の一人にすぎなかった私」(『有坂秀世自傳著述拾遺』の「あとがき」。以下、同書を『著述拾遺』と簡稱する。)である。にぎにぎしく幟を押し立てて、生誕百年と慶祝するよりも、一年後の今日、ひっそりとその人を偲ぶ方が似つかわしい。

もう一つの一百一年がある。かつて、一高の東寮第五番室で、朝五時から夜十時まで、有坂氏と競うように学んだ藤田良雄氏は、『語勢沿革研究』の福井方言のインフオマントでもあったが、昭和三十年五月十二日、「低温度星の分光学的研究」によって恩賜賞を授与された天文学者でもある。日本学士院長在任中の平成十一年一月十四日、歌会始の儀で召人をつとめ、青空の星を究むとマウナケア 動き初めにしすばる称へむ と詠んだ。退任後の平成十四年二月一日には、ハワイのマウナケア山頂(約四、二〇〇メートル)にあるそのすばる望遠鏡でうさぎ座R星を観測した。現在、私と同じ東京都多摩市にご健在であり、わが多摩市の誇りである。

さて、このたび、教え子諸氏が、有坂氏について私書いたものを集め、一本として刊行してくれることになった。これまで、私のしごとは無視されつづけて来た、と自分ではそう思っていたが、身近かにいた教え子諸氏が私を評価してくれていたとは、予想外のことであった。この上もない喜びで、教師冥利につきる。

計画がスタートして、まず書名をどうするか、ということが問題となった。序文に記されているよ

うに、初案は『有坂秀世研究—人と学問—』であった。

恩師水谷眞成先生によると、その師倉石武四郎博士は、「なかなか研究などということではできません。いつになっても勉強です。」といつておられたという。以来、私は、自分のしていることを研究、自分の書いたものを論文と呼ばないようにつとめて来た。

ただし、対外的なばあいは別である。科学研究費申請のときには、私が代表者となって、「中国近世音の研究」として申請したこともある。本書所収の「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで—」は、その「研究」成果でもある。

本書に「有坂秀世研究のために—療養生活その他—」という一文がある。このとき、私は、将来誰かが（その中に自分を含めていなかった。）有坂秀世論を展開するための礎となることを企図していた。本書の大きな柱の一つは、名称はともかく、実質的に有坂秀世略伝である。私は調査し、その結果を報告した。いわば、調査報告が主体である。それを「研究」と呼ぶには、ためらいがある。仮に『有坂秀世研究のために—その人と学問—』としても、題と副題との関係が、いまひとつしっくりしない。

一方、本書は、既印刷物を版下として写真製版することになっているので、関係諸機関に許可ももらう必要がある。そのためにも個人的ためらいにこだわった書名よりも、はっきりした『有坂秀世研究』がよい。これもまた、対外的な科学研究費の申請と同じである。

しかしながら、最終的に決断したのは、私の心の問題としてであった。たとえ本書の主体が略伝にかかわる調査報告であろうとも、若干はそうでないものを含んでいる。こそこそと逃げ口上を弄するばあいではない。ここは一番、正面切って、有坂秀世その人の厳正な審査を受けなければならない。『有坂秀世研究』と決したゆえんである。

ここで、昭和十八年五月二十一日消印の「金田一京助先生」あて有坂書簡を引く。

なほ、昨年末、澁谷の明世堂主人が三回程來訪致し、私の既に發表致しました雜誌論文を纏めて出版させてもらひたいと懇望致しましたので、「國語音韻史の研究」といふ名で、一部分の出版に承諾を與へておきました。以前に先生から、御話がありました際には、身體の丈夫な頃で、唯先へ先へと進んで行きたく思ひ、缺陷だらけの過去の仕事の再發表などは、更に思ひもよらぬ事と存じて居りましたが、今回は、既に全く空白の一年半を過し、將來もなほ當分は生産能力を回復し得まいと思つて居りました時に、話が出ましたので、やらせて見ようかと思ふ氣持が動いた次第でございます。……

〔著述拾遺〕 p.三四〇

学士院賞を授与された『國語音韻史の研究』を「缺陷だらけの過去の仕事の再發表」と呼ぶ有坂博士（このとき、すでに「博士」であった。これは、学位記の受領を報告する手紙である。）のことは、私にとってまさに頂門の一針である。

本書に収録された私の文章は、長短さまざまなものから成っている。發表した場も、学会誌もあれば、紀要もあり、学生向けに書かれたものもある。あるいは、腹にすえかねて、ある雑誌に投書したもので含まれている。このように形や量の上でふぞろいな「缺陷だらけの過去の仕事の再發表」にどれだけの意味があるのか。ここに至ってただ恐懼するよりない。

教え子諸氏は、このような私をどう思うであろうか。

なお、このたびは、誤植の訂正と若干の補修をおこなった。「缺陷だらけの過去の仕事の再発表」なれど、せめてこのことで、すこしでもお許しを賜わることができたら幸いである。

今回、教え子諸氏の中でも、吉池孝一氏、中村雅之氏、竹越孝氏には格別にお世話になった。筆を擱くに当って、篤くお礼を申しあげる。

平成二十一年六月二十五日（木）、二十年前、『著述拾遺』が刊行された日に書き終る。

慶谷 壽信

編集後記

いま、すべての原稿の整理を終えて印刷製本に回す段階に至り、心から安堵している。ここでは、編集の経緯と補足的な事柄を簡単に記しておきたい。

出版計画をスタートするにあたり我々が合意したことは、所収の諸篇について、既刊の印刷物をそのまま版下として使用することであった。そこで、まず関係の諸機関に対し書面で計画の概要と趣旨を説明するとともに、版下として使用することの可否について問い合わせたところ、幸いなことにすべての機関から快諾を得ることができた。この場を借りて、以下の各位に厚くお礼を申し上げたい（カッコ内は刊行物）。

日本語学会（『国語学』）、首都大学東京都市教養学部人文・社会系（『人文学報』）、國學院大學総合企画部広報課（『國學院雜誌』）、大修館書店（『言語』）、早稲田大学中国文学会（『中國文學研究』）、長崎外国語短期大学国際コミュニケーション学科（『国際文化入門Ⅲ』）、三省堂（『有坂秀世^{日本語学}著述拾遺』）、同学社（『トンシユエ』）、日本中国語学会（『中国語学』）、野村先生受章記念刊行会（『野村正良先生受章記念言語学論集』）、明治書院（『日本語研究諸領域の視点』）、内山書店（『中国語』）

なお、『人文学報』と『中國文學研究』の掲載論文につき使用許可を得る際には、我々の先輩である佐藤進、落合守和、古屋昭弘の三先生より格別のご配慮を賜り、また出版に関するアドバイスもいただいた。併せて謝意を表したい。

その後、慶谷先生にコピーをお送りして初校・再校と朱を入れていただき、我々はそれに基づいて修正を加え、印刷用の原稿に仕上げていく作業を行った。修正は主として誤植および字体・仮名遣い

に關するものであるが、特に新たなコメントが加わった場合には、「補」として注の最後に組み入れた。また、参照ページは、原則として原載誌のページの横に「本書〇〇頁」として注記した。

本書所収の諸篇は、その一ページ一ページがすべて手作りである。我々は、まず掲載誌や抜刷からコピーを取ってレイアウト用紙に貼り付け、慶谷先生の朱筆に基づいて切り貼りで訂正を加え、再度コピーを取ってページを印刷し、修正液で汚れを消し、最後に先生に見ていただくためのコピーを取る、といった一連の作業を、一篇ごとに繰り返した。本書のために慶谷先生とやり取りした書簡は、半年間で五〇通を超える。我々は、こうした地味で愚直な作業を通じて、慶谷先生の授業を改めて受け直したと言えるかも知れない。そして、作業のために週に一回か二回吉池氏の研究室に集い、一方で手を動かす、編集上の問題について議論しつつも、慶谷先生の授業風景や、かつての都立大中文研究室の思い出を語り合った時は、何物にも代えがたい贅沢な時間だったように思う。

慶谷先生を直接の指導教員としたわけではなく、門弟としては文字通り末席を汚しているに過ぎない身ではあるが、先輩諸氏とともにこのたびの出版を喜びたい。最後に、この手作りの書物とともに編んだ吉池孝一氏と中村雅之氏、そして何よりも著者である慶谷壽信先生に、深甚の感謝を申し上げます。

二〇〇九年八月末日

竹越 孝

『KOTONOHA』単刊号4

有坂秀世研究 ― 人と学問 ―

二〇〇九年九月五日 第一刷発行(非売品)
二〇一〇年十二月六日 第二刷発行(非売品)

著者 慶谷 壽信

発行者

古代文字資料館

〒四八〇―一一九八

愛知県愛知郡長久手町大字熊張字太次ヶ廻間

一五三二二三 愛知県立文学E五二一研究室内

Tel 〇五六―一六四―一一一 (内線三五二)

E-mail museum@foraich-pu.ac.jp

URL <http://www.foraich-pu.ac.jp/museum/>

印刷製本

株式会社 シイ

Toshinobu KEIYA 2009 Printed in Japan

ISBN 978-4-904038-04-8 C3080

ISBN 978-4-904038-04-8

C3080

古代文字資料館